

序

茶道の哲学的研究書の久しぶりの登場である。私はこれを、大いに慶賀したい。

本格的な哲学書としての茶道書がなかなか現れないことには理由がある。それは、「哲学」という学問の持つ宿命でもある。

そもそも「哲学」とはいかなる学問であるのか。これについては、私も、哲学者の末席に連なる者として、私なりの考えがあるが、こゝでは私見を出すのを避け、手許の辞典を繰ってみよう。

世界や人生の究極の根本原理を客観的・理性的に追求する学問。とらわれない目で事物を広く深く見るとともに、それを自己自身の問題として究極まで求めようとするもの。
(小学館『日本国語大辞典』)

どなたがお書きになったか分からないが、まことに見事な説明である。私は感動した。特に「それを自己自身の問題として」というところに深く同感した。

世に哲学者と自称し、また他称される学者は少ないが、それらの方々の中には、歴史上著名な哲学者たちの哲学の内容の整理紹介を専らとし、哲学を、本当に自己の生き方の根本に関する問題として掘り下げようとはなさ

らない方も多く見受けられる。そういう方々の業績は、それはそれとして貴重ではあるが、私はやはり、「それを自己自身の問題として究極まで求めようとする」研究者にいつその共感を持つ。本書の著者もそういう研究者の一人である。

本書の著者の朴珉廷さんは、大学院で茶道の学問的研究に励み、修士・博士の学位も取得した学者であるが、同時に、情熱的な茶道の実践者でもある。茶道を学ぶとともに、多くの人に茶道を教授し、茶会を主催し、茶室の設計指導もこなす、まさに「学行一如」の人である。それ故、本書の哲学的論考には、実践の裏付けがあり、そこに本書の一つの良き特色もある。

振り返ってみると、後世に長く読み伝えられる、すぐれた芸術的論考を生み出した人たちの多くは、机上の研究者であるのみならず、実践の人でもあった。定家、世阿弥、心敬、珠光、紹鷗、利休など、みなそうであった。実践を伴う研究者たちは、そのような強みを持つ反面、理想の実現のために多くの時間を奪われるが故に、学的研究面での弱点の発生を防ぐことが難しい。本書の著者にもそれがある。その克服は、これからの課題でもあろう。

私は、この本の著者が、持前のねばり強さと情熱を傾けて、学問・実践の両面で更に向上されることを信じ、期待している。

二〇一九年二月

洛南 桂 無庵にて

倉澤行洋

はじめに

従来、茶湯においては「わび」「さび」が重視されてきたが、「そぞう鹿相」がそれに劣らぬ重要な理念であることとを、私は本書で明らかにしたい。

普通、「そぞう」は「あらい」「粗末」「不始末」など、否定的な意味を表し、現代日本では「そぞう（粗相）のないように」とは言っても「そぞうになるように」とは決して言わない。ところが、日本の数寄茶湯を伝える茶書『山上宗二記』には、茶人の心得を伝える最も大事な項目のなかで、「そぞう」が肯定的に唱えられている。『山上宗二記』において、茶人の在り様をはじめ、もてなし、懐石、茶室、茶室、灰形、取り合わせの在り様に至るまで、茶湯を成り立たせる重要な諸要素について「そぞう」が唱えられていることに注目した私は、学会で発表し、研究を進めてきた。

そこで、気付いたことは、「そぞう」が、「十体」の中から示された「風体」であることだった。「十体」とは、十の「風体」という意味で、藤原定家に始まる「藝術論」であるが、山上宗二は茶湯における独自の「十体」を掲げている。「風体」とは、従来藝論では「姿」に相通じる用語であるため、近代西洋の美学から論じられる際は、主に姿のみを対象にしている。しかしながら、日本の「風体」の特徴は、「姿」と共に「心」、すなわち藝を行う主体の「心の在り様」をも伴っている。そのため、心の方を抜きにして、姿のみを論じることは、車の片輪のみで動かそうとしていることに等しい。だからこそ、本書では、「風体」の

立場から両方を見ようとするのである。

「姿と心」との関係は、まるで「体と心」と同様である。二つのように思われるが、実際は、その二つは繋がっている、一つである、「不二」として存在しているのである。論理展開の便宜上、「姿」と「心」とを切り離している点を、ご理解いただきたい。

なお「籠相」の「籠」は仏教経典の教義では「妙みょう」と合して「籠妙」の対義語をつくるが、これは金春禅竹の能楽論においては「籠にしてさらに妙」なる無上の姿、境地を示す語であった。『山上宗二記』でいう「そそう」も、一般的にいう、してはいけない悪しき「そそう」ではなく、理想的姿（風体）・境地としての善き「そそう」と捉えられる。

私は日本茶道が追求したこの理想を、「そそうの哲学」として論じたい。この「そそう」こそ、東アジア世界でいつの時代にも求められ続けてきた「自然しぜん」にほかならぬであろう。「そそう」の背景にある、茶禅一味の茶道観は「人生哲学」として、藝術論を基盤とした風体論は「藝術哲学」として、人が四季折々の自然と共にあることを善しとする自然観は「環境哲学」の世界観として、示唆するメッセージが、読者の皆様に届けられれば幸いである。

二〇一九年二月

朴 珉廷

〔付記〕本書出版にあたっては、公益財団法人三徳庵から「茶道文化学術助成金」を頂くことができた。
ここに記して御礼申し上げます。

目次

序……………倉澤行洋……………i

はじめに……………iii

序 章……………3

はじめに……………3

第一節 藝道の定義……………4

一 伝統藝術……………4

二 藝道……………7

(一) 藝道の定義

(二) 藝道の三要素

三 藝道における修行……………12

(一) 修行の定義

(二) 「藝道即仏道」

第二節 藝道の修行論についての先行研究……………19

第三節 本書の構成と研究方法……………25

第一章 藝道における修行の段階論……………31

第一節 多段階論……………31

一	『論語』	32
二	『風姿花伝』	33
三	『十牛図』	35
第二節	三段階論	38
一	「守破離」	38
二	「三道」	42
三	「心の三段階」	44
第三節	二段階論	46
一	「向去と却来」	46
二	「稽古と工夫」	48
三	「色即是空と空即是色」	50
四	「高く心を悟りて俗へ帰るべし」	52
五	「姿から心へ、そして心から姿へ」	52

第二章 『山上宗二記』における修行論……………

第一節 「茶禪一味」の修行論 57

一 「珠光の茶湯には仏法もその中にある」 57

- (一) 「円悟墨蹟」が伝える禪茶の正統
- (二) 珠光の茶湯における心と姿

二 武野紹鷗の「茶禪一味」 68

三 「茶湯の風体は禪宗より出る」 70

第二節 名人の修行論 74

一 『論語』の影響 74

二 名人を指す修行 75

(一) 「茶人の分類」による名人論

(二) 古今の名人リスト

(三) 名人の段階論

三 究極の名人 88

(一) 「名人の果て」は「道具一種さえ楽しむ侘教寄が専也」

(二) 「茶湯の果て」は「枯かしけ寒かれ」

第三節 茶人の修行論 97

一 茶人における「覚悟」 98

二 「茶湯者覚悟十体」の修行 100

(一) 「茶湯者覚悟十体」の構成

(二) 「茶湯者覚悟十体」の解釈

三 「又十体」の修行 113

(一) 「又十体」の構成

(二) 「又十体」の解釈

第三章 数寄茶湯の風体「そそう」

第一節 「そそう」の風体の登場 132

一 「そそう」の表記と意味 132

(一) 「そそう」の表記

(二) 「そそう」の辞書的意味

(三) 三つの「そそう」(善きそそう・悪しきそそう・道具のそそう)

二 「そそう」についての言及 134

第二節 茶書にみる「そそう」 136

一 『分類草人木』における道具の「そそう」 137

(一) 『分類草人木』「小壺」

(二) 『分類草人木』「風炉・囲炉裏類」

二 『山上宗二記』における「そそう」 139

(一) 茶人の在り様としての「そそう」

(二) もてなしの在り様としての「そそう」

(三) 懷石の在り様としての「そそう」

(四) 茶室の在り様としての「そそう」

(五) 灰形の在り様としての「そそう」

(六) 取り合わせの在り様としての「そそう」

三 『山上宗二記』以降の「そそう」 152

第三節 山上宗二の風体観 153

一 茶湯の全般を風体で示す 156

(一) 茶湯の全体的な慣わしについて、禪宗の風体を用いたと示す

(二) 時代の茶湯を代表的茶人の風体で示す

(三) 茶湯の行い方や個別の教えを風体で示す

二	茶湯の理想を風体で示す	161
三	名人の茶湯を風体で示す	164
四	小括	168
第四節	「そそう」が登場する二つの背景	170
一	思想的背景	170
	(一) 禪	
	(二) 正直	
	(三) 不二	
二	風体論の伝統	173
	(一) 風体の分類	
	(二) 風体における修行の順序	
	(三) 「麗妙論」の伝統	
三	東洋的自然観	188
第五節	山上宗二の「そそう」の特徴	189
一	茶人観としての「そそう」	191
二	茶道観としての「そそう」	191
	(一) 茶人自身の表現としての「そそう」	
	(二) 取り合わせとしての「そそう」	
	(三) 「数寄道具の眼」としての「そそう」	
	(四) 山上宗二の「そそう」と「わび」	
三	心の境地としての「そそう」	197
第六節	「そそう」の事例	197

一 伝書からみる「そそう」 198

(一) 珠光の「そそう」

(二) 紹鷗の「そそう」

(三) 利休の「そそう」

二 利休の逸話からみる「そそう」 204

(一) 『近古史談』における利休の露地掃除

(二) 『茶話指月集』における利休の露地掃除

(三) 自然体としての「そそう」の風体

三 「そそう」の藝術的表現 208

(一) 「鳥鳴山更幽」

(二) 「古池や蛙飛び込む水の音」

(三) 「月も雲間の無きは嫌にて候」

(四) 「山寺昏鐘第一鼓」

(五) 揉みから紙(揉み紙)

第四章 「守破離」

第一節 「守破離」の由来 217

一 「守破離」の初見 217

二 「序破急」との相違 220

三 「空」思想に基づいた「離」の境地 222

第二節 修行の三段階としての「守破離」 224

一 「守」の段階 藝から至心への道 225

終章 「そそう」の現代的意義

一 古今東西に通じる「そそう」 243

243

第三節

二 「破」の段階 至心から藝への道 226

三 「離」の段階 藝道の究極 227

茶道伝書にみる「守破離」 228

一 『心の文』にみる「守破離」 228

(一) 「守」の段階

(二) 「破」の段階

(三) 「離」の段階

二 『山上宗二記』にみる「守破離」 230

(一) 「守」の段階

(二) 「破」の段階

(三) 「離」の段階

三 『南方録』にみる「守破離」 233

(一) 「守」の段階

(二) 「破」の段階

(三) 「離」の段階

四 伝統と創造としての「守破離」 240

(一) 伝統(守)

(二) 創造(破)

(三) 新伝統(離)

(一) 「そそう」の哲学

(二) 「自然体」としての「そそう」

(三) 「離」の境地としての「そそう」

二 今後の研究課題として

246

主要参考文献

あとがき

英文要旨

あとがき

障子窓から入る日差しは、茶室をやさしく包み、聞こえるのは釜の煮え音だけ。そこで私は一服のお茶をいただいた。瞬間、心から平和を飲んだという実感がした。当時、一枚の障子窓越しのソウルの街は、催涙弾のにおいがまだ漂っていた時代だった。のちに、「一皿からピースフルネス」という裏千家千玄室先生のメッセージを伺うようになったのだが、私は、初めてお茶に出会ったその瞬間を今でも忘れられない。

その後、私はお茶の稽古に通い始めた。お点前は、自分を自分で見つめるプロセスであった。そのような稽古が終わると、自分が清められた気分になった。まるで坐禅後のように、あるいは教会での礼拝後のように。自分を清めるためにはお茶をすればよく、宗教はいらないと思った私にとって、お茶が私の宗教になってくれた。

ところが、そのお稽古が続くと、「利休の茶」、「茶の心」、「わび」、「さび」ということを教えてもらうけれども、皆それぞれ自分の思いを語るようで、「本当の利休のお茶はなにか」とは自分で探さなければならぬことがわかった。それから、『山上宗二記』との出会いがあった。利休のお茶を知る最も大事なご縁ができたのである。利休を知ろうとするうちに、いつの間にか、作者山上宗二は私の恋人になっていった。寝ても覚めても彼から離れることができなくなったから。それは修士論文を書く時だった。私は、利休が、また宗二が目指した茶人はどういう者であったかを問いかけた。答えは、「まず名人になって、そして道具一種を楽しむ侘び数寄」で生きることであった。

しかし、せっかく宗二が「風体」ということばで説いてくれる教えが、なかなか理解できなかった。そこで、第三の出会いが生まれた。倉澤行洋先生とのご縁である。著書『藝道の哲学』を通して、心の修行と風

体に関する優れた研究成果のある倉澤先生が、私の疑問に耳を傾けて下さった。おかげで「守破離」の修行の三段階から入って「わび」ということについて、少し理解ができるようになったつもりであったが、実際自分でお茶を表現する時、これが「わび」であるかどうかの判断ができなかった。その時、運命的な「そそう」との出会いがあった。私は「そそう」に出会ってから、やっと安心した。「そそう」は、数寄茶湯の原点にあつて、茶をどのように行うべきか、また茶を行うことによつて何を指すべきかを、目に見えるように、手にとるように、教えてくれたからである。しかし、やさしいことほど、難しいものである。「そそう」つまり「自然体」であること、それを生きることがはそう簡単なものではない。三歳でもわかることを八十歳が行うのはむずかしいと古人も言ったように。

私は以前からまわりにこうよく言ってきた。「そそう」という大事なことを後世の日本の茶人が見過ごしているから、宗二が茶の信者である私をわざわざ韓国から呼んでくれたのだと。そしていよいよ宗二の思いを「そそうの哲学」として、世に出すことができるようになった。

本書の刊行にあたって、これまでご縁のあつた方々に心より厚く感謝申し上げます。特に悪しきそそうで世話が焼ける弟子を寛大に見守ってくださった倉澤先生に御礼申し上げます。ならびに本書の第一読者として、私を励ましてくださった編集者の大地亜希子さんにごころより感謝申し上げます。

最後に「そそうの哲学」として『山上宗二記』を書き残してくれた山上宗二に本書を捧げたい。

二〇一九年二月

「哲学の道」を歩みながら

朴 珉廷

I'd be happy if I could convey these messages to the readers. First, the essential meaning of "Soso" is based on Zen in the Way of Tea which is the philosophy of life. Second, the Way of Art (Futei theory) is based on philosophy of Art. Third, "the view of the nature" is environmental philosophy that is harmonized with nature in each season.

Minjeong Park, Ph.D.

〈English Editorial Supervision by Sokyō (宗京) Kasai and Somi (宗弥) Yamashita〉
The publication of this book was supported by the grant from the Tea Culture Scholarship of the Santokuan Foundation (三徳庵、茶道文化学術助成金), a public interest foundation.

Having examined these references, I have discovered “Soso” in the *Yamanouesoji-ki* as a fundamental and indispensable philosophy of Chado that influenced many elements that made it possible to form the Way of Tea. They are seen in the ideal attitude of a Chajin, how to treat guests, how to set up a tearoom, how to make kaiseki, how to prepare ash, and how to harmonize every utensil.

I was so interested in “Soso.” For the research, I depended on the theory of “the Way of Art” by Dr. Yukihiro Kurasawa. He defined “the Way of Art” as “From the appearance to mind and then from mind to the appearance again (姿から心へ、心から姿へ).” The theory is unique because it includes and shows the purpose, method, and direction of “the Way of Art” step-by-step and in a practical manner. Appreciating and making use of his theory, I was able to achieve that philosophy of “Soso.”

In the Buddhist scriptures, “So (麿)” is often combined with “Myo (妙)” and makes a word “Somyo (麿妙)” which Konparu Zenchiku (金春禅竹1405~1471) also valued as the highest form and the status of a Noh performer in his Noh theory.

The term of “Soso” in the *Yamanouesoji-ki* is not used as a “bad Soso” but rather a “good Soso” or even an ideal attitude. Here, I can identify the philosophy of “Soso” in “Suki Chanoyu,” too, which was inherited from the Way of Tea that was developed and passed down through Shuko (珠光) as a founder, and Joo (紹鷗) and Sen Rikyu. Originally, the “Soso” spirit was based on Zen Buddhism (茶禪一味), and was developed together with the tradition of “Futei” theory in traditional Japanese arts. And finally, the traditional sense of nature that has been shared in East Asian countries where people’s lives are deeply involved in each of the four seasons was blended and harmonized into one and “Suki Chanoyu” emerged.

In conclusion, I would like to observe that “the natural form (自然体)” came out of the state of the mind of “free from any conditions ‘Ri (離)’”, the last stage in the theory of the stage of the training “Shu Ha Ri (守破離).”

The Philosophy of “Soso” in the Way of Tea —The origin of “Suki” in the Way of Tea (Chado)—

In the past, “Wabi (わび)” and “Sabi (さび)” were emphasized in the Way of Tea, but in this book I made it clear that “Soso (麤相)” is an important philosophy as well.

Generally, in Japan, “Soso” means a negative thing like “rough,” “coarse,” or “mistake.” People would often say “Don’t do Soso!” but, they would never say “Do Soso.” However, in the *Yamanouesoji-ki* (『山上宗二記』 1588), “Soso” is presented as a fundamental and essential appearance and philosophy in the attitude of every aspect of the Way of Tea, as follows:

1. As a Chajin (tea person), keep in mind appearances with “Soso” but establish the inside with good faith.
2. As a form of hospitality, not only for the aristocrat and the tea master but also the ordinary person, do outside in “Soso” but prepare for the guests feeling that you host for experts and masters in spirit.
3. As for the condition of ash, put the ash in every detail carefully but the look is “Soso.”
4. For Kaiseki, prepare it by expending time, effort, and money, but still make the Kaiseki look like “Soso.”
5. In setting up a tearoom, make it look “Soso” in the same way as the Kaiseki cuisine.
6. As a way of making harmony with the utensils, for instance, isn't it even more interesting to use gorgeous tea utensils in a “Soso” tea room? That would be so attractive and sophisticated since Shuko (珠光) used to say that “a fine horse is suitable to a straw hut.”

◎著者略歴◎

朴 珉廷 (Park MinJeong)

韓国出身、日本茶文化研究者。芸術学博士（宝塚造形芸術大学大学院）。

韓国外国語大学を卒業後、茶の道を始め、茶道裏千家専門学校で修行（裏千家みどり会奨学金を得る）。その後、裏千家ソウル支部で茶道師範として活動。「『山上宗二記』にみる茶人観」という論文で修士学位取得（中央大学 韓国）、韓国の大学で非常勤講師として活動後、ふたたび日本留学（平和中村財団の奨学金を得る）。茶室「陵風」設計プロデュース（2017）。

現在、西京大学韓日文化藝術研究所特別研究員（韓国）、国際伝統藝術研究会幹事、世界禪茶文化交流大会コーディネーター、心茶会・茶の湯文化学会会員。

主な著書等に『そそう—茶の理想的姿を求めて—』（f.c.i Publish、2017）、『茶室露地大事典』共同執筆（淡交社、2018）、「茶道、遊戯の人文学」（『遊び文化に見る日本』共著、J&C、2018、韓国）、『日本茶道の理論と実技』訳書（月刊茶道（韓国）、2007）、「韓国の茶文化」翻訳（『野村美術館研究紀要』第22号、2013）など。

そそうの^{てつがく}哲学—^{すきちやのゆ}数寄茶湯の^{げんてん}原点

2019（平成31）年2月28日発行

2019（令和元）年11月20日第2刷

著者 朴 珉廷

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-533-6860（代表）

装 幀 上野かおる（鶯草デザイン事務所）

印 刷 亜細亜印刷株式会社
製 本